

武士の朱子学・庶民の陽明学

武士の朱子学、日本三大藩校日新館

朱子学は、南宋（なんそう）の儒学者、「朱熹（しゆき）」が唱えたもので、「理気二元論（りきにげんろん）」が基本。

「理」とは、万物がこの世に存在する根拠で、「気」は万物を構成する物質、それぞれ別のものですが、単独では存在し得ず、互いに作用し合う関係にあるとう。人にあてはめると「性即理（せいそくり）」という教え。「性」は人の本質で静かな状態すなわち「理」で。性が働く「情（気）」になり、「情」のバランスが崩れると「欲（悪）」になるという。常に情のコントロールが必要という。すべての物事には、上下関係があるとされ、上の身分や父親の言うことは絶対、とする「君臣父子（くんしんふし）の別」を重んじていた。また朱子学は、知識を学ぶことが前提で、学ぶ機会がない人々はいつまでも偉くなれないという。

徳川幕府は、元禄3年(1690)5代将軍綱吉は「湯島聖堂」を建てた。幕府老中松平定信は、寛政2年(1790)5月24日、寛政異学禁止令を出し、朱子学以外の教育を禁止。寛政9年(1797)幕府直轄学校の「昌平坂学問所」を建てた。会津藩でもその命に従い寛政10年(1798)会津藩校日新館の建設を計画し、日本三大藩校が享和3年(1803)完成した。

庶民の陽明学とは

陽明学は、明（みん）の儒学者「王陽明（おうようめい）」が唱えたもの。陽明学では、「実践躬行（じっせんきゅうこう）といい、心のままに、自分の責任で行動すること」を説き平等な思想が特徴で、理論などを自らの力で実際に実行してみることである。

「実践」は実際にやってみること。

「躬行」は自分の力で言い行うこと。

口に出していうだけではなく、実際にやってみることの大切さをいう言葉。江戸時代の思想は朱子学、古学(山鹿素行)と陽明学がある。陽明学の呼び方は明治以降に日本で広まったもので、江戸時代は王学といった。中国の明時代に王陽明が起こした儒教の一派で、朱子学(仁・義・道・徳の教え、文明・文化主義、仏教・道教を批判する思想で、『易経』と『中庸』の教え)と区別する際には、心即理(鏡のような心)を主要な思想とすることから心学あるいは明学、陸王学といった。形骸化した朱子学を批判し、時代に即した実践躬行(じっせんきゅうこう)を説いた。そのため、陽明学は、私欲、妄想を心の叫びと勘違いして、反体制側が好んで学び、正義や革命運動にも使用された。そして陽明学は、身分制度をきらう庶民に受け入れられた。大塩平八郎や吉田松陰、河井継之助、西郷隆盛、岩崎弥太郎、渋沢栄一が陽明学を学んでいる。

陽明学は、会津では藤樹(とうじゅ)学と呼び 会津は日本三大聖地の一つ

中江藤樹(とうじゅ)は、慶長13年(1608)3月7日、近江国(滋賀県)の農家出身。与右衛門と称し、藤樹と号した。9歳の時、祖父150石徳左衛門吉長の養子となり米子藩に行くが、元和2年(1616)に伊予大洲藩(愛媛県)に国替えとなる。元和8年(1622)に祖父が死去に伴い100石を相続した。27歳で脱藩し、京を経て郷里(高島市)の近江に戻り、私塾を開く。屋敷に藤の大木があったため藤樹書院といった。当初は朱子学を学んでいたが、次第に陽明学の影響を受けるようになった。藤樹の教えは、身分の上下を超えて、平等な思想が特徴だったことから広がり、武士だけでなく農民、商人、工人まで広く浸透した。近江聖人もいわれた。慶安元年(1648)10月11日41歳で死去している。墓所は滋賀県高島市の玉林寺にある。

日本最初の庶民の学校 会津稽古堂

寛文4年(1664)会津藩主保科正之(まさゆき)は、城下北西の桂林寺町西側にあった岡田如黙の私塾を学問所とし、日本最初の庶民の学校、稽古堂とした。貞享2年(1685)から岡田定好を堂主とした。元禄元年(1688)には本一之丁に設置されていた講所と合せ、町講所(まちこうしょ)として甲賀町東口に設置した。

会津の弟子たち

会津の弟子らに、荒井真庵(しんあん)、大河原養伯(ようはく)、無為庵岡田如黙(じょもく)、矢部惣四郎(そうしろう)、五十嵐養安(ようあん)、遠藤謙安(けんあん)、東条方秀(かたひで)、井上安貞(やすさだ)中野義郎(よしくに)、矢部湖岸(こがん)、五十嵐常成(つねなり)らがいる。その教えは、瓜生岩子、明治の自由民権運動、蓮沼門三らに影響を与えた。

